

デューラー研究 第18

デューラーの「絵画論」(4)

男性均衡論の草稿の試訳

美術学科

下村耕史

Dürer's Drafts of his "On Painting" (4)
a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前3回の報告(第20巻, 1989年, 第22巻, 1991年, 第23巻, 1992年)と同じく, Dürer: Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von Hans Rupprich. Zweiter Band. Berlin. 1966を底本として試みられたデューラー未完の「絵画論」の草稿の訳である。凡例は前回に従う。

(承前) **Nr. 22** 8頭身の強健な男性像(サムソン) A B ないし A A B B。頭部の側面・正面・背面・平面像。頭部以外の肢体部の長さ。等比数列による膝の位置の決定。側面と幅の大きさ。背面像。上からみた(男性 B B C C の)手。上からと垂直にみた足(足の平面図と外観)。(ニュルンベルク草稿, 1513/15年, R. 2. 196~211頁)

最初, サムソンを描く際に用いられるような強健な男性の比例を測ることにする。その男性の全長分を示す線を引く。上を a, 下を b と記す。この線分 ab の上から 1/8 の所に水平線を引く。頭部はこの 1/8 に含まれる。3つの方形を並べ, その中に頭部を描く。各方形の高さを 1/8 とし, おなじ高さに並べ, 顔の側面を示す方形を最初に定める。この方形の幅を 1/8 とし, 方形を正方形にする。それでこの正方形の上の線は頭頂部に, 下の線は顎に接することになる。

ただし頭部の正面と背面を示す方形は, 横幅が 1/10 である。

まず顔の側面を示す方形から始めるとして, その2つの垂辺のうち前方を a, 後方を b とする。

方形の2つの水平線のうち, 上を j, 下を n とする。

つぎに顔の部分の全ての高低を示す水平線を引く。

そして顔の部分の全ての高低〔を示す線に〕に文字を記す。

そして次のように線を配置する。

n の上 1/10 の所に線 k を定める。この線は額の旋毛と後頭部のつむじを通る。

そして k n を 2 線 l m で 3 等分する。線 l は眉毛の両端を通り, 眉毛の中央は線の上にくる。この線は耳の上端に接する。線 m は鼻と耳の下端に接する。

k l 間を 2 点で 3 等分する。その最下部に線 o を引く。この線は眉毛の上の額のくぼみの位置を示す。

l m 間を 2 点で 3 等分する。その最上部に線 p を引く。

眼全体はこの l p 間に含まれる。眼の前後の隅は l p 間の中央にくる。

また l m 間を 3 点で 4 等分する。最下部に線 q を引く。この線は鼻翼の上端と耳朵特有のくぼみに接する。後頭部にはこの線上に特有のくぼみがある。

m n 間を 2 点で 3 等分する。最上部に線 r を引く。この線は口の中央を通る。

そして m r 間を 2 点で 3 等分する。上の 2 部分は鼻下のみぞの長さになり、最下部は上唇の厚みになる。

また r n 間を 7 点で 8 等分する。上の 3 部分に線 s を引く。この線は顎の上端に接する。後頭部の頸部への移行もこの線上に存する。

さらに rs 間を 1 点で 2 等分する。上部は下唇の厚みになり、下部は下唇と顎の間のくぼみになる。

また額は旋毛の両側で高まり、その高まりは j k 間の 1/6 の長さ分、線 k の上にくる。

こうしてこれらの水平線により顔の主要部の高低の位置を定めた。

さらに垂線で頭部の諸部分の奥行きを定める。前方から後方へと奥行きを測る。

それを次のようにする。

頭部側面を示す方形の 2 本の垂線 a b 間を 6 本の垂線 e d e f g h で 7 等分する。この最初の線 c は眼球の前面、鼻の後部、口の後端に接する。

垂線 c と水平線 j のなす角から垂線 a と水平線 m のなす角まで真っすぐな対角線を引く。後者の位置を t とする。

いま引かれた線 c t と水平線 k の交点が額の旋毛の位置である。

額の線は膨らみながら線 c t の上にくる。また鼻全体は線 c t の下になる。

2 本の水平線 m n と 2 本の垂線 a c とのなす方形の中央に垂線 v を引く。

この線は上唇の上端に接する。また 2 本の水平線 r n 間で、垂線 v c 間を 2 本の垂線で 3 等分する。

その前方の線は下唇と顎の前端に接し、後方の線は顎と下唇のあいだのくぼみに接する。

2 本の水平線 l p と 2 本の垂線 c d とのなす方形の中央に眼の後方の隅がくる。

眉毛は前方から線 d までの長さになる。額の後端は垂線 e f 間の中央にきて、そこで額は髪と髪のない露出部に分かれる。髪は水平線 p までくる。額の露出部は線 d 上で j k 間の 1/6 の長さ

分水平線 k より上にくる。耳全体の長さは f g 間に含まれる。小さな耳朶は f g 間の頬よりの半分に含まれる。後頭部のつむじは h b 間の中央にくる。また前述した後頭部のくぼみは水平線 q 上の h b 間の中央にきて、水平線 s 上の頸部までさがる。

頸部は後方で線 h、前方で線 d に接する。

頭部は垂線 f 上で水平線 j に接する。

その接点から頭部は弧を描きながら額の旋毛と後頭部のつむじの双方へさがる。

頭部は後頭部のつむじから垂線 b 上の水平線 l まで弧を描きながらさがる。頭部の奥行きはそこが最大である。

頭部の線をそこから適当な形で弧を描きながら頸部までさげる。

そして頸部の線を方形の外、線 n の下方に引く。

額の線をはっきりした形で膨らませながら斜線 c t の上にくるように、そしてその上方の膨らみが 2 水平線 k l 間の上の 2/3 にはいり、眼の上にくる下方の膨らみが下の 1/3 にはいるようにする。

眼の線を前述した位置〔l p と c d のなす方形〕に引く。

眉毛の中央は垂線 c 上で、2 つの水平線 o l 間の半ばまで、線 l の上にくる。

線 c t の下に鼻の線を引く。

つぎに口、顎、頬の線を前述した位置に引く。耳についても同様にする。耳から頬の線を顎までさげる。

頭部の側面について記述され、また描かれたので、つぎにその正面像をつくることにする。

側面像の全ての水平線を延長して、顔の正面を示す方形に通せば、〔顔の〕全ての部分の高低が〔正面像にも〕移される。

顔の正面の方形について記そう。

頭部の側面の全ての部分の高低を示す水平線を延長して、顔の正面の方形に通す。この平行線により頭部の正面の全ての高さは、側面と同じ高さに分けられる。

こうすれば顔の正面像についてなすことは、部

分の幅を示す垂線を引くだけでよい。

方形の2つの垂辺を ab とする。 ab 間を4本の垂線 $cdef$ で5等分する。その中央部に鼻と口を描き、鼻翼の両端は2線 de に接する。また口の両端はこれらの線をこえる。

顎も de 間に描く。ただ顎の幅はこの2線をこえてかなりのびる。 de は眼の内側の隅に、 cf は外側の隅に接する。

ac と fb を2線 gh で2等分する。

ag 間と hb 間を2線 jk で2等分する。耳は ag 間と hb 間にはいるが、その上部は2線 ab をややこえる。頬の線を耳から顎まで引く。

顎の幅は水平線 n 上で $1/17$ である。

垂線と水平線が交差して、〔顔の〕全ての高さと幅が得られたので、その中に顔の形をきちんと描き入れて、頭頂部が de 間で水平線 j に接し、頭部の両端が水平線 o 上で ab に接するようになる。そして頬の線を耳から下に引く。……眼の線をその位置に引く。また眉毛の線を、その中央が水平線 ol 間でそれぞれ垂線 cd 間と ef 間の中央を通るように引く。

鼻の前方の線を鼻翼を含むその後方の幅の半分で de 間に引く。

耳朵は2垂線 jk 間と hg 間に頬よりにはいる。

頭部の両側は水平線 q 上で2垂線 jk に接する。また頭部の両側は2水平線 ko 間で両側辺 (a b) に接する…

そして眼の形、頭部の丸みその他必要な線を引く。

頭部の正面が描かれたので、つぎにいま描かれた2図からその背面を方形に描く。

頭部の正面の輪郭線は、背面のそれと同じである。後頭部のつむじの線をその位置に引く。背面からみられる髪と耳についても同様である。

つぎに側面と正面の2図から〔平行斜線により頭部の〕平面図を描くことにする。

頭部の側面と正面のいま描かれた2図から平面図を描く。まず頭部側面の方形の全ての平行垂線を真下に延長する。また頭部正面の全ての平行垂

線も下に延長する。つぎに直線 iy を垂線と交差させて引く。この水平線 iy が頭部の側面と正面の2方形の垂辺と交差する点を z と x とする。 x は正面の垂辺からの交点である。そして頭部正面の方形の下に、角 y から垂線 ax 〔の延長上の、正面の幅と同じ長さの位置〕まで斜線を引く。その交点を z とする。こうして直角三角形 xyz ができる。直角が x である。2辺 xy と xz は同じ長さでなければならぬ〔この文節の意味やや不明〕。

男性頭部が描かれたので、それを〔全長の〕 $1/8$ の大きさでその位置に定める。こうして後初めて他の肢体部の長さを分ける。

頭頂部から足裏まで男性〔の比例〕について記そう。

頭頂部を a 、足裏を b として、その間を線で結ぶ。

頭頂部からのどの凹みまで $1/6$ である。

頭頂部から乳頭の高さまで $1/4$ である。

頭頂部から脇腹まで $1/3$ である。

男性の体は中央から〔両脚に〕分かれる。

のどの凹みから臍まで $1/5$ である。

のどの凹みから前の腋下まで $1/14$ 、後ろの腋下まで $1/12$ である。

腋下から肩の高さまで $1/12$ である。

顎から胸下まで $1/7$ である。

のどの凹みから胸骨の下端まで $1/9$ である。

乳頭の高さから腰の下端まで $1/5$ である。

脇腹と腰の下端の間に腰特有の線を引く。そこで胴体部は美しい線で大腿部と分岐する。その特有さに忠実であれば、それを正しく引くことができる。

臍から腹の下端まで $1/10$ である。

臍から陰茎まで $1/9$ である。

胸下から臀部の下端まで $1/4$ である。

男性の中心部から大腿部間の隙間まで $1/9$ である。

足裏から足の甲の高さまで $1/18$ である。

〔等比数列による膝の位置の決定〕

つぎに膝を正しい比例(マース)で定めねばならない。男性の胴体部〔のどの凹みから腰関節まで〕は最

大最強の肢体部とみられる。胴体部は他の小さい肢体部を動かすために、それらより大きく強い。自然では強いものが弱いものをつねに支配する。人間の体にも同じことが格別にいえる。それで肢体部の背面を前面より長く厚くして、それだけ前面を支配できるようにすることが適切である。われわれはそれを人の腕、手、指、脚、足、足指にみるのであって、前面は背面よりも短く小さい。

それで男性の3つの最長部（胴体部、大腿部、下部）の長さを比例させて、最強部が最長になるようにしよう。

男性の最長で最初の肢体部として、のどの凹みから腰の下端までの胴体部の長さを定める。それは諸部分の集合体であり、他の肢体部を動かす完全な強部である。

つぎに長い男性の肢体部は腰の下端から膝中央までの2つの大腿である。これは前記の胴体部全体より短くなければならない。

3番目の長さは膝から足までの2本の脛骨で、それは脛骨の外側の踝の下端までである。それは必然的に3つの最長部のなかで、最も短い。そしてより小さな2部分をより大きな部分に対して比例させなければならぬ。つまり胴体部と大腿部と脛骨を比例させなければならぬ。即ち、最初の長さが第2のそれに対する比は、第2の長さが第3のそれに対する比と同じになるようにしなければならない。

エウクレイデスはそれについて定める…

その定理を用いて、最初の長さを定めてそれにより他の2つの長さを決めなければならない。三角形 abc を作る。 ab は水平の辺である。 b は直角で、 bc は垂線である。つぎに bc を2点 de で3等分し、角 a から2直線を点 de に引く。こうして等比数列がそこから求められる手段が得られた。

それをつぎのようにする。

定規にのどの凹みと脛骨の外側の踝の間の長さを記す。のどの凹みの点を f 、脛骨の下端の点を h とする。 fh 間にのどの凹みから腰の下端までの胴体部の長さを示す点を記して、それを g とす

る。

いま記された定規を、線 ad 上に点 g がのるよ

うに三角形上におき、点 f が線 ac に、下の点 h が水平線 ab に接するまで定規をずらす。定規が動く間、定規の点 g は線 ad 上につねにとどまらなければならない。そうすれば、線 ae は定規と交差して、体全体に関して3つの比例部分を作る。線 ae が定規と交差する点を j とする。こうしてつぎのようにいえる。 f はのどの凹み、 g は腰、 j は膝、 h は脛骨の外側の踝の下端である。また角 a からの4線を点 $cdeb$ を通って、必要なだけ延ばすこともできる。上部を大きくしようと思えば、〔定規の〕上を点 c に近づければよい。上を小さく下を大きくしようと思えば、定規を上下逆にすればよい。この図法をフェアグライフェリンとよぶことにする。それは肢体部を相互に比例させるからである〔前稿、デューラーの「絵画論」(3)の掲載図参照〕。

〔フェアグライフェリンの図にそえて〕

のどの凹み。腰の下端。膝。足の甲。

膝の位置が決められたので、脚の他の部分をつぎに分ける。

膝中央から脛骨の外側の踝の下端まで $1/4$ である。

膝から外側のふくらはぎの下端まで $1/10$ である。

膝から内側のふくらはぎの下端まで $1/8$ である。膝から $1/40$ 下の脚の外側に特有の切れ目がある。

同様に大腿部の内側にも $1/26$ の所に特有の切れ目がある〔基点不明〕。

膝上 $1/20$ の所の大腿部の外側に特有の切れ目がある。

同様に膝上 $1/30$ の所の大腿部の内側にも切れ目がある。

足裏と脛骨下部の踝との間を2点で3等分する。最下部が親指の厚さになる。

腕の長さを測る。

のどの凹みから肘まで $2/11$ である。

肩肉の下端はその中央にくる。

肘から中指の外側の先まで $1/4$ である。
 中指の内側の先から手首まで $1/10$ である。
 これらの長さの線を引いて、それに腕の諸部分の厚さと幅を示す線を加えなければならない。
 男性側面の厚さを示す線から引き始める。
 [のどの凹みの] 線での厚さは $1/14$ である。
 肩の高さの線での厚さは $1/13$ である。
 肩関節の高さでの厚さは $1/11$ である。
 胸部上の厚さは $1/7$ である。
 前の腋の線での厚さは $1/11+1/12$ である。
 乳頭上での厚さは $1/11+1/12$ である。
 胸下での厚さは $1/6$ である。
 胸骨の下端での厚さは $1/12+1/13$ である。
 脇腹での厚さは $1/7$ である。
 臍上での厚さは $1/8$ である。
 腰の切れ目での厚さは $2/15$ である。
 腰の下端での厚さは $2/13$ である。
 腹の下端での厚さは $1/13+1/14$ である。
 陰茎の線での厚さは $1/13+1/14$ である。この線での臀部を含む大腿部の厚さは $2/15$ である。
 男性の全長の中心での厚さも同様である。
 ただし陰茎はその前に出る。
 臀部の下での大腿部の厚さは $2/17$ である。
 膝の特有の切れ目での厚さは $1/9$ である。
 膝上の上での厚さは $1/11$ である。
 膝上の下での厚さは $1/12$ である。
 膝中央の厚さは $1/13$ である。
 膝下の上での厚さは $1/14$ である。
 膝下の下での厚さは $1/14$ である。
 外側のふくらはぎの下端での厚さは $1/12$ 。
 内側のふくらはぎの下端での厚さは $1/14$ 。
 足の甲の上での厚さは $1/20$ である。
 足の甲の線での厚さは $1/19$ 。
 踝の下端での厚さは $1/14$ 。踵の高さは踝の下端より上にくる。
 足の長さは $1/6$ である。指は前の $1/3$ に含まれる。
 腕が胴体部から分岐する肩下での、腕の側面の厚さは $1/11$ である。
 後ろの腋下での厚さは $1/14$ 。
 腕の中央の力こぶの厚さは $1/16$ 。

肘での厚さは $1/20$ 。
 肘下の最強部での厚さは $1/9$ 。
 さらにその下の厚さは $1/28$ 。
 手〔関節〕での厚さは $1/32$ 。
 手の厚い部分での厚さは $1/30$ 。
 こうして男性側面の厚さが測られた。つぎに男性正面の水平線上の諸肢体部の幅を、第2の垂線上でつぎのように測る。
 顎先での頸部の幅は $1/15$ である。
 肩の高さでの幅は $1/13$ である。
 肩関節の高さでの幅は $2/11$ 。
 のどの凹みでの幅は $4/17$ 。両肩関節間は $1/5$ 。
 胸上の幅は $4/15$ 。肩関節上でも同様。
 両腋間の幅は $1/10+1/11$ 。
 乳頭間の幅は $1/8$ である。
 脇腹での幅は $2/11$ である。
 腹の下端での幅は $1/9+1/10$ 。
 脇腹の下端から腰の下端まで体の両側で直線をひけば、水平線上の腰の中央の切れ目の幅がわかる。
 男性の全長の中央での幅は $2/9$ である。臀部の下で大腿上部の幅は $2/19$ 。
 さらにその下の、大腿部特有の切れ目での幅は $1/11$ 。
 膝上の上の幅は $1/13$ 。
 膝上の下での幅は $2/27$ 。
 膝中央の幅は $1/15$ 。
 膝下の上の幅は $1/16$ 。
 膝下の下での幅も $1/16$ である。
 ふくらはぎ中央の幅は $2/27$ 。
 外側のふくらはぎ下端の幅は $1/14$ 。
 内側のふくらはぎ下端の幅は $1/16$ 。
 足の甲の上の脚部の幅は $1/30$ 。
 足の甲での幅は $1/24$ 。足指上の足の幅は $1/16$ である。
 つぎに腕の正面の幅を測る。
 乳頭の下での腕の幅は $1/22$ である。
 中央の力こぶでの腕の幅は $1/20$ 。
 肘下と肘上の幅は $1/24$ 〔?〕。
 肘の幅は $1/22$ 。

肘下の腕の最強部での幅は $1/17$ 。

さらにその下の幅は $1/23$ 。

手首の幅は $1/28$ 。

手の幅は $1/16$ である。

男性の肢体部分の全ての長さ、厚さ、幅について記されたので、男性の姿形は正しい性質でそこに描き込まれなければならない。その例を線 a a b b 上の図で示した。記述に図解を添える方が分かりやすいからである。

男性の側面と正面の線が引かれたので、つぎにその背面の線を引かなければならない。その輪郭線は正面のそれと同じである。ただしのどの凹みの高さから後ろの腋下まで $1/11$ であり、両腋間の幅は $2/16+2/17$ である。

踵の幅は $1/28$ である。

臀部の下端からの分割の高さは、後ろの図にみるように、 $1/11$ である。

足の甲の高さを低くしようとすれば、低くした分だけ、膝と肩関節間の長さに加えることである。そうすれば、不格好な形にはならないであろう。

つぎにこの強健な男性の開いた手を前よりも実際的にはっきりと記し、それを幾分大きく図解しよう。

手関節から中指の先までの手の長さは、b b c c の男性の全長の $1/10$ であることは、前に述べられた。

$1/10$ のこの線分を垂直に立て、その上端と下端に水平線 a と水平線 b を引く。中指の先が線 a、手関節が線 b に接するように、その間に手を描く。

$1/10$ のこの線分を18点で19等分して、それらの点に数字を付し、上から下に1,2,3…とする。

点11から平行な水平線 c を引く。この線 c は中指と人差し指の2つの最下の関節の中央を通る。

両方の関節は同じ高さで並立しているからである。

点14から平行な水平線 d を引く。この線 d は親指の付け根の関節の中央を通る。

点6から平行な水平線 e を引く。この線は中指の第2関節の中央を通る。

a b 間に垂線を立てる。この垂線が水平線 a に接する点を g とし、線 b に接する点を h とする。この線 g h と水平線 c の交点を j とする。線 g h は手と中指の中央を通る。

a e 間を6点で7等分し、上の3部分に水平線 k を通す。線 k は中指の第1枝を通る。この指の長さは分けられたので、つぎに人指し指の長さを分けよう。

中指の第1枝の a k 間に、点2から水平線 l を引けば、人指し指の長さは l c 間に含まれる。

その指をつぎのように分ける。l c 間を水平線で2等分する。この線 m は人指し指の第2関節を通る。l m 間を7等分する。上の3部分が第1枝で、下の4部分が第2枝である。第3枝は m c 間である。

人指し指の長さも分けられたので、つぎに親指を測る。

点7から平行な水平線 n を引く。この線は親指の先に接する。親指の長さを7等分する。

上の3部分が第1枝で、下の4部分が第2枝である。

残りの2指は特別な仕方で描かれる。

つぎのようにする。

コンパスをとり、支脚を点 h に、他方の脚を点 j におく。点 j は中指の最下の関節の中央にある。コンパスでその点から円弧を描く。薬指と小指はこの円弧上で手に描き込まれなければならない。この2指は中指と人指し指より低く位置しているからである。

点1から平行な水平線 o を引く。

この線 o は薬指の上端に接する。

薬指の長さを7等分し、下の3部分を最下枝とし、上の4部分をさらに9等分する。その上の4部分を第1枝とし、下の5部分を第2枝とする。

つぎに小指を手に描き込む。小指は中指の下の2枝より短い。

小指の長さを11等分する。下の5部分を第3枝とし、上の6部分を第1枝と第2枝とする。水平線 e は第1関節の中央を通る。

あるいはつぎのようにする。

第 1 肢と第 2 肢を 9 等分する。上の 4 部分を第 1 肢とし、下の 5 部分を第 2 肢とする。

爪の長さは第 1 肢の半分を占める。

手の諸部分の長さが測られたので、つぎにその幅を測る。

手関節の幅は $1/28$ である。

手の付け根の節での腕の幅は $1/29$ である。

さらに〔肘側の〕腕の幅は $1/30$ 。

水平線 d 上の、親指の最下の関節上の手の幅は、中指の長さに等しい。

線 g h は中指と手関節の中央を通るので、線の両側で手の幅は同じになる。

中指〔の最下の関節上の点 j〕を通る円弧の〔手における〕最下点での手の幅は、人指し指の長さに等しい。

中指の下の幅はその長さの $1/5$ である。その指先の幅は下のそれより $1/4$ ほど細い。

人指し指の下の幅は中指のそれと同じであるが、指先の方は中指のそれより細い。

薬指の下の幅はその長さの $1/5$ で、指先の方が $1/4$ ほど細い。

小指の幅もその長さの $1/5$ であり、指先の方が $1/4$ ほど細い。親指の幅はその長さの $1/3$ よりやや細い。

手の諸部分の比例が全て図示されたので、手の線をよい形でそこに引き入れる。

中指の付け根は手の長さの半ばにあるが、次図にみるように、薬指と小指の付け根は、手が使いやすいように、より低い位置にある。横から手がくぼんでみえることにも留意することである。それで手は厚いようにみえるし、親指と小指は内向きになっている。親指の下の手の厚さは、手の長さの $2/7$ である。指はところどころ厚さの方が、幅よりやや大きい。

いま述べた手の図はフェアケラーで長くも短くもされる〔ルップリッヒによればこの文は後にデューラーにより付記された。フェアケラーの説明は本稿にはみられないが、訳出予定のデューラー草稿で記される変形の 1 図法〕。

手が描かれたので、つぎに足についても前より詳しく記述し、図解しよう。

前に記された男性 b b c c と同様に、足の長さを男性全長の $1/12 + 1/13$ とし、その水平上の幅を $1/17$ とする。この長さとの幅の方形を描いて、上の水平線を a、下の水平線を b とする。

また 2 つの垂線のうち指側を c、踵側を d とする。中指が垂線 c、踵が垂線 d に接するように、足をこの方形に描かなければならない。

足は親指の後ろの引っ張りで水平線 a に接するが、踵ではそれに接しない。

また足は小指の後ろの引っ張りで水平線 b に接する。

この方形にまず足の平面図を描く。

この方形を分けることから始める。

垂線 c d 間を 2 本の平行な垂線、前が e 後ろが f、で 3 等分する。最前部を足指、中央部を足の甲、第 3 の最後部を踵にし、その上に脚がくる。

2 本の水平線 a b 間で垂線 d を 6 点 g h j k l m で 7 等分し、点 g から (水平線 a に) 平行な水平線を垂線 c まで引き、垂線 c との交点を m、垂線 f との交点を n とする〔m という表示は重複使用されている〕。

〔垂線 d 上の〕点 m から平行な水平線を引く。

この線と垂線 f の交点を o とする。

点 h から平行な水平線を引いて、垂線 f から男性の全長の $1/17$ だけ通させる。

垂線 c を 2 本の水平線 ab 間で 2 等分し、その〔分割〕点を q とする。

線 c 上の q b 間を、上が r 下が s の 2 点で 3 等分する。2 垂線 c e 間で水平線 b を 2 点 t v で 3 等分する。また 2 垂線 e f 間で水平線 a を 2 点 x y で 3 等分する。さらに 2 垂線 f d 間で水平線 a を 2 点 z f' で 3 等分する〔f' はテキストの f に似た文字の代用〕。その際、点 t は線 c に、点 v は線 e に、点 x は線 e に、点 y は線 f に、点 z は線 f に、点 f' は線 d に近い方を指すことを、つねに理解してほしい〔意訳〕。

つぎに点 z から平行な垂線を引く。

点 f' と垂線 d 間で水平線 a を 2 点、前が t 後ろが ω 、で 3 等分する〔t という表示は重複使用されている、また ω はテキストの文字の近似的表示〕。

点 l から平行な水平線を引き、それと垂線 f' の交点を β とする〔 β はテキストのクローバの葉の形に似た特殊な記号の代用〕。

つぎに線 pe と線 qy の斜線を引く〔 p は初出であるが、これはあきらかに垂線 c 上の点 m のことである〕。斜線 qy と垂線 e の交点を γ とする〔 γ はテキストの特殊な記号の代用〕。

斜線 sf 、それに角 bc と n とを結ぶ斜線を引く。

斜線 tf' を引く。

点 v から斜線 tf' まで垂線を引く。

つぎにコンパスをとり、支脚を点 γ におき、他方の脚を点 p 〔垂線 c 上の点 m のこと〕において、そこから斜線 qy まで円弧を描き、さらに線 sf ならびに角 bc と n とを結ぶ線という2つの斜線の間まで円弧を描く。

さらにコンパスの支脚を点 γ においたままで、他方の脚を点 q において、そこから斜線 sf まで円弧を描く。

またコンパスの支脚を点 γ においたままで、他方の脚を点 v において、そこから角 bc と n とを結ぶ斜線まで円弧を描く。

つぎにコンパスの両脚の幅を高さ pb 〔 p は垂線 c 上の点 m のこと〕分だけとり、支脚を点 x におき、他方の脚で、2斜線 qy と tf' の間に円弧を描く。この円弧と、斜線 qy 、 sf 、角 cb と n とを結ぶ斜線との各交点から垂線を上方に引く。〔親指を除く〕4つの足指はこの〔垂線間の〕幅で分けられる。また小指の付け根の長さは垂線 v と e の間での斜線 tf' の長さの2/3まではいかない。

これらの直線が全て引かれたので、それらの線に足の形を描き込む仕方がほぼ示される。

まず踵の上に当たる、方形の後ろの1/3にその形を入れる。そうすれば足の甲の平らな部分からはっきり区分される。

脚の下部後背の腱は水平線 h 上で垂線 ω に接する。水平線 h 上での脚の長さは足の1/3である。

垂線 z 上の脚の幅は両踝をいれて1/24である。外側の踝はさらに下に広がり、〔そこでの脚の幅も〕1/24である。内側の踝は水平線 a に接する。内側

の踝の方が外側の踝より足指に近い。また内側の踝は外側のそれより平らで幅広い。外側の踝の方が尖っていて、それと後ろの腱の間のくぼみは、内側の踝のそれより低い位置にある。

脛骨の線を踵の真上でなくやや内側よりに引く。また踵の線を、踵が脛骨の外側の踝を筋違(すじかい)に強く支えられるように、やや外側よりに引く。

踵の幅を広げたいければ、その内側の方を上の方の水平線にもっと接するようにすればよい。

踵と内側の踝はともに水平線 a に接する。それで、内側の脚の線を、いま理解したように、引くことである。

踵の線を、点 j に接するように引く。踵は zf 間で点 j から水平線 a まで円弧を描く。さらにそこから垂線 f の2点 f n 間の下の方の1/3まで円弧を描く。

〔それに続けて〕足の線を線 e まで引く。親指の後ろの膨らみは水平線 a に接する。足の内側のへこみは yf 間で水平線 pg に接する〔 p は垂線 c 上の点 m のこと〕。踵の線を点 j から角 β まで円弧状に引く。そこから線を湾曲させながら点 o まで引く。さらにその線を小指の後ろの水平線 b まで引く。 ef 間の前1/3で〔小指の後ろの〕膨らみは水平線 b に接する。脚の下部には fz 間で特有のくぼみがあり、そのくぼみの線を外側の踝の前につける。

足裏のくぼみから高めるように、脚下部から前へと足の甲の線を引く。

まず足指の線を ce 間の前の方1/3に引き入れる。粗野な人々の足指とみられないように、足指の線を真っすぐでなく、いま引かれた斜線にそって引き入れる。

親指を、足の甲からの出方が小さく、小指の方に傾くように、描く〔意識〕。それで親指の線を2本の斜線 pe と qy の間に引き入れ、その先が点 p を通る円弧に接するようにする〔点 p は垂線 c 上の点 m のこと〕。親指の幅を、その間にそれが作られる2本の斜線を充たすほどにする。ただその膨らむ部分は、斜線 pe をこえる〔 p は垂線 c 上の点 m のこと〕。親指は他の指に比べてはるかに大きい。

親指には2肢があり、足の長さの1/4を占め、水平線 pg にそうて伸びる (p は垂線 c 上の点 m)。後肢の方が前肢より1/3ほど長い。爪は前肢の半分の長さである。

つぎに中央の3本の指を描く。

それぞれの指の長さをつぎのようにして見いだす。

コンパスの支脚を点 f に、他方の脚を、水平線 pg 上の親指の長さを示す点におく (p は垂線 c 上の点 m 、親指の長さを示す点が不明確)。その点から、斜線 qy , sf , 角 cb と n , tf 間の3区分を通過して円弧を引く。これらの区分と外側の円弧の間に指のそれぞれの長さが含まれなければならない。またこれらの斜線は、中央の3指が外側の小指の方に向いていることを示す。その方がよい形になり、支える力も大きい。

第2指を斜線 ry と sf 間、第3指を2本の斜線の間、つまり角 cb と n および sf 間、第4指を角 cb と n および tf 間に作る。

中央の3指はそれぞれ後肢が前の2肢よりやや短い。また第2肢を第1肢より1/3ほど短くする。

小指は前で垂線 v に接し、内向きで、短く、(他の指に比べて) 足の甲の非常に深い所から出ている。

小指は後ろで非常に強く膨らむ。

こうして足の最大部分の平面図がほぼ得られた。

足の平面図が作られたので、つぎにこの平面図の上に、その立面図を描く。

平面図の全ての垂線をウーバートラークにより、上方に延長すれば、足指の長さ、付け根の深さ、踝の位置、踵と脚下部の位置関係が示される。上に平行に引かれたウーバートラークにより、足の立面の諸部分の全ての長さが示される〔ウーバートラークについても前のフェアケラーについての説明と同様である。本草稿の前半に記された頭部の平面図を作る際に利用された直角三角形による転移の図法を指す〕。

2本の垂線 cd 間で足の諸部分の長さが測られたので、その高さを測る。

それをつぎのようにする。

フェアトラーク〔ウーバートラークの別称〕により上に引かれた全ての垂線に2本の平行な水平線を通す。〔水平線の〕上を a , 下を b とする。2本の水平線間の高さを男性全長の1/20とする。これは足裏から足の甲の頂点までの高さである。

こうして垂線 cd 間と水平線 ab 間で方形ができる。この方形は足の平面図の方形の上に水平に位置する。

足裏から足の甲、つまり線 b から線 a までの高さは、足の長さの1/3である。あるいはそれを男性の全長の1/20にする。

足の諸部分の高さをそのなかで測る。

ab 間を上下 ef の2本の水平線で3等分する。水平線 e が脛骨の外側の踝の下と踵の上に接するように、足の線をその方形に描き入れる。

踵の上の反りを水平線 ae 間の半ばまでとする。腱がそれに続く。

水平線 ef 間と垂線 zy 間の方形に、脛骨下部の踝の下に、足の甲の高まりの線を入れる。足の甲の高まりは水平線 e をこえる。

足裏は水平線 b 上にある。

足の甲は垂線上で水平線 a に接し、垂線 ef 間の半ばで水平線 e まで下り、そこからさらに2水平線 ef 間の下1/4の所で垂線 e まで下りる。

つぎに親指の節の線を、水平線 f 上方の垂線 e から、垂線 ce 間の中央の、水平線 f まで引き下ろす。

親指の後肢は水平線 f の上方にあり、前肢の爪は fb 間の上1/4〔の線〕に接する。

小指の後肢の上端は fb 間の上1/5〔の線〕に接し、足の重みを支えるために、その後ろに強い膨らみがある。小指は線 f と b には接しないで、前方が小さくなっている。

つぎに中央の3指について、親指の隣の指の後肢が親指のそれよりやや低く、第3指がさらに低く、第4指がもっと低くなるようにする。一方から減じて他方を作るというように、内から外に向かうにつれて、指を小さくする。また足指の後肢は〔立面でみれば〕水平に並び、前肢は低くなって地に接し、指先は幅広くなる。爪のある前肢の長

さを、前述したように、平面図からフェアトラークにより決める。足の立面図に必要な全てのものを平面図から線を引いて得る。足の平面図と立面図の両方が描かれたので、足の背面図をつぎに描こう。

〔いま訳出されたニュルンベルク草稿の手と足の比例の記述はテキストだけでは理解し難い。テキストで「図解しよう」と述べられる図は本訳の底本であるルップリッヒ編の「デューラー遺文集」(Dürer: Schriftlicher Nachlass, 2. Band, Berlin 1966)の図版にもシュトラウスの「デューラー素描集」(W. L. Strauss: The Complete Drawings of Albrecht Dürer. Vol. 5, New York 1974)にも掲載されていない。これらの図は失われたか、描かれないままであったとみられる。そこで右図に、この記述と内容上密接に関連するデューラーの「ドレスデンのスケッチ帖」(W. L. Strauss: Albrecht Dürer. The Human Figure. The Complete 'Dresden Sketchbook' New York 1972) 中の手と足の比例素描を参考図として示すことにする。図1は同書の122図、図2は125図である。〕

Nr. 23 前稿に掲載。

Nr. 24 最初に測定された男性像比例の部分的変更 (ロンドン草稿, 1513年かそれ以降, R. 2, 212~213頁)

最初に測定された男性像 [Nr. 21の男性像 A B, 前稿掲載] の比例を変えようと思えば、次図の男性像にみるように、つぎのようになる。

第一に肩肉は肩から頸部の顎の水平線まで高まる。

男性正面像の頸部の幅は1/15である。

男性正面像の肩下での腕の幅は1/23である。力こぶ中央での腕の幅は1/21。肘上での腕の幅は1/23。

両腋下間の幅は1/10+1/11である。

男性正面像の大腿部の幅は膝中央で1/16である。膝下の下の幅は1/16, ふくらはぎ中央の幅は1/14, ふくらはぎ下端の幅は1/17である。

男性正面像の他の部分はすべて前の通りである。

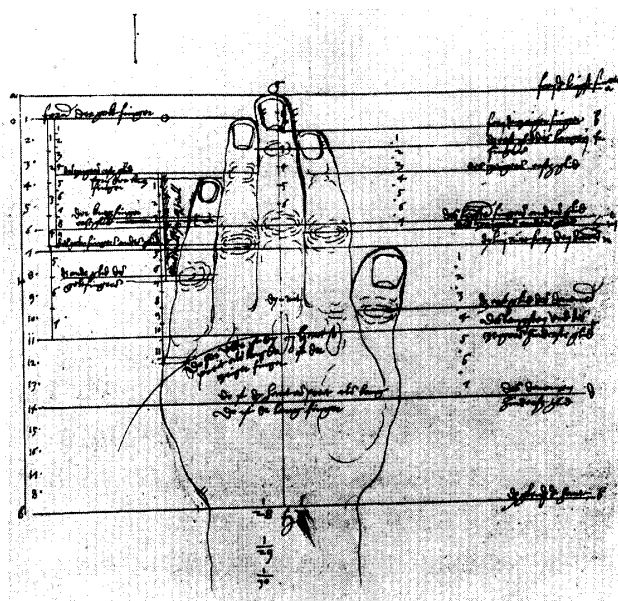


図 1

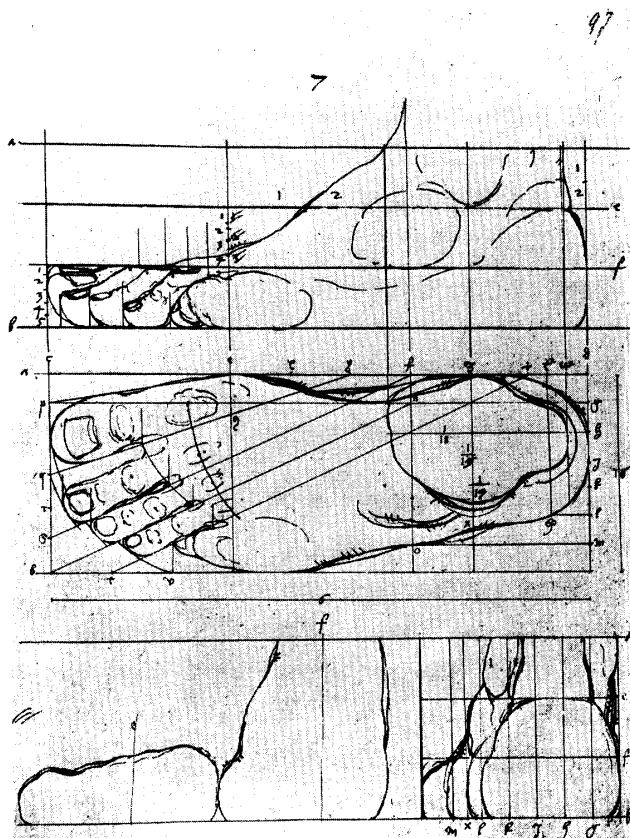


図 2

男性側面像ではこの部分を変える。

膝中央から脛骨下端の踝まで1/4、踝は脛骨の下にあり、[外側の踝の位置は]内側の踝より低い。

男性の中心から臍まで1/9である。

臍から腹の下端まで1/12である。

臍から陰茎まで1/11である。

脇腹から腰まで1/16である。

他の部分はすべて前の通りである。それで自分の最も良しとするものを用いることである。

Nr. 25 8頭身の男性の別の比例。腕の長さ、男性正面像の幅、上の肢体部の下のそれに対する関係。のどの凹みから足の甲まで33部分(ロン草稿、1513年の年記とモノグラム、R.2,213~214頁)

1 別の比例

頭部は1/8。

頭頂部からのどの凹みまで1/6。

顎から乳頭まで1/8。

乳頭から臍まで1/8。

臍から陰茎まで1/9。

頭頂部から脇腹まで1/3。

腰の下端は男性の中心より1/16上にある。

腰から膝まで大腿部の線を引く。

膝から脛骨の下端まで1/4。

膝から足の高さまで1/17。

腕の長さ

手は1/10。

肘までの手の長さは1/4。

肩から肘まで1/5。

正面像の幅

肩以上では2/9。

臍上では1/7。

腰上では1/6。

臀部での大腿部は1/11。それを7等分すれば、膝の幅は4/7である。

ふくらはぎの幅は膝と同じである。

足上の脚の幅はその半分である。

体の背部は前部よりつねに強く、厚く、長い。そのことは手で観察されるし、胴体部についても

そうである。

肩の高さから胴体を1肢体部とみなす。それが多肢体からなるとしてもである。

腰から膝まで第2の肢体部となる。その長さを胴体部より短くして、より弱い感じにする。強部が弱部を支配するからである。

また脛骨も大腿部より短くしなければならない。

同様に足も脛骨より短い。

足指も脛骨より短い。

先になるほど肢体部はますます短くなる。

のどの凹みから足の甲までの長さは33等分される。のどの凹みから腰の下端までの胴体部はその12部分に当たる。また11部分が腰の下端から膝中央までになり、残りの10部分が膝から足の甲になる。

2 断片のため省略

Nr. 26 太めの8頭身男性の比例。側面像、腕、正面像(ドレスデンのスケッチ帖、1513年かそれ以降、R.2,215頁)

これは太めの男性の比例である。

つぎのように記される。

[側面像に] 中心

[正面像の幅として]

頭頂部。

額。

眉毛。

鼻。

顎1/15。

肩の高さの下端。

のどの凹み2/11。

腋1/5。

乳頭1/9。

胸下。

胸骨の下端。

脇腹1/6。

臍。

腰の上端。

腰1/5。

腹の下端。

陰茎上で3/28。

男性像の中心3/28。

大腿部間の隙間1/12。

膝上の上1/14。

膝上の下。

膝中央1/14。

膝下の上1/18。

膝下の下1/17。

外側のふくらはぎ1/15。

内側のふくらはぎ1/16。

足の甲1/25。

足裏。

長い3肢体部〔胴体部、大腿部、脚部〕は等比数列により測られる。

Nr. 27 断片のため省略。

Nr. 28 8頭身の男性像。側面、正面、腕、背面像（1,2,3ともロンドン草稿、1と2は断片のため省略、3は1515年頃、R.2,216~217頁）

3

8頭身について

あるいは男性の肘の長さを脇腹に当たる以上にのばさなければ、つまり $2/11$ の長さにすれば、胴体部の長さは $1/6$ にされ、その正面は $1/7$ 、手は $1/10$ 、肘は $1/4$ のままである。

〔比例の表示としてクローバの葉が2枚記される〕

肘、手、指先。

頭頂部。額。顎。肩〔肉〕の高さ、肩〔関節〕の高さ。前の腋下。乳頭の高さ。胸下。胸骨下。脇腹。臍。腰の上端。腰の下端。腹の下端。陰茎上。〔臀部の〕分割。臀部の下端。大腿部間の隙間。膝上の上。 $1/11$ 。膝上の下。 $1/11+1/12$ かその間。膝中央。膝下の上。膝下の下。外側のふくらはぎの下端。内側のふくらはぎの下端。足の甲の高さ。脛骨の下端。足裏。

のどの凹みから臍まで $1/5$ 、のどの凹みから脇腹まで $1/6$ にする。

肩〔関節〕の高さから胸骨の下端まで $1/8$ である。

脚部を記された通りに真っすぐにしてもよいし、よくあるように、膝上を変えてもよい。膝下についても同様である。好きな方を選べばよい。

のどの凹み。